

「剃刀の刃」に関する覚書

— Maugham の思想を中心に —

脇 田 勇

序

1. 「剃刀の刃」のテーマ
2. Maugham の思想の遍歴

序

作家 Maugham に哲学、思想のみを求めることはあまり意味のあることではないし、事実思想の探究を試みても、平明な表現や性格描写の巧みさに眩惑されて、どこに彼の哲学があるかを抽出することは容易なことではない。作中人物に語らせている思想が、すなわち作家の思想であるという断定は危険でもあるし、もし断定を下すとしても、全作品のパースペクティブの上に立ってのみ可能であろう。この小論では、彼の代表的長編 *Of Human Bondage* (1915. 41才) と幾多の長編、短編、劇作、エッセイを書き続け、その総括として書いたと言ってもよい *The Razor's Edge* (1944. 70才) との間の脈絡を辿ることで、彼の思想、換言すれば世界観、人生観をさぐってみることが目的である。Maugham が読書を楽しませることを創作の目的としたことは事実である。しかし読者が非常に個性的な登場人物とストーリーの興味ある転開の追求に終っていたとすれば、これだけ世界中に層の厚い読者を持つことはできなかつたであろうし、また文壇に確固たる地位を保つことも不可能であったであろう。必ずしも読者を思索の世界へ導入する作家ではないが、その魅惑の筆致の中に、人間として共感をおぼえさせる哲学、思想が、きわめて巧妙に内蔵されているものと認めざるを得ない。

Of Human Bondage では主人公 Philip Carey の青春彷徨を通して、自伝的に作者の過去を跡づけていると言えるが、芸術、殊に生活に、より完全な人生模様を創造すること、*The Summing Up* の15章で言っている「書くことも本質的な要素であるが、人間本来のあらゆる他の活動もふくみ、最後には、完全な終りとして、死が仕上げするような模様……」を織り上げて行くことであると結論したかったのである。友人 Cronshaw から贈られたベルシヤ絨緞の謎が大英博物館の中で、忽然として氷解するくだりは、この作品のハイライトとなっているが、一つの美的完成をめざす探究の記録であると言うことができる。両親の死後、牧師の叔父夫妻の保護をうけつつも、Philip は神の存在を信ずることができず、神の否定の結果、人生の光明を見出し、それに代る人生の原動力として、無目的な物理的法則、機械的決定論を考えるようになる。

The Moon and Sixpence (1919. 45才) では、画家ゴーギャンをモデルにした Strickland が、この世的なあらゆる桎梏をかなぐり捨てて、タヒチ島に渡り、死に至るまで、芸術三昧にふける執念の姿を描いている。そこでは美の不可思議、美の恐怖、美の崇拜が説かれている。Strickland の友 Stroeve が、自分の妻の裸体を画いた憤怒と嫉妬の相手 Strickland に「僕たち二人は共にブランシュ (Stroeve の妻) を愛したのだ。オランダの私の母の家には、君を置くぐらいの余裕があるから、一緒に来ないか。」と生活に困窮している Strickland に話しかける姿の中に、美の崇拜と人間性の不可解さが見うけられる。Maugham が芸術を愛好したことは、1962年に自分の所蔵する絵画の中からもっとも気に入りの作品を選び *Purely for My Pleasure* という画帖を解説つきで出していることからもうかがえるが、彼の芸術観が端的に吐露されている作品として、スペイン旅行記の形になっている *Don Fernando*⁽¹⁾ (1935) をあげることができる。

Painted Veil (1925. 51才) では Maugham の代弁者 Waddington に

(1) 拙稿「ドン・フェルナンドの教えるもの」(人文研究第29輯 1965. 1.) 参照。

よる美的生活の礼讃がある。人は ego に執着する限り地獄に通じ，ego を捨て神と人に奉仕することで救われ，そこに美があるという思想である。反面 ego を何らかの意味で捨てきれない人間——*Of Human Bondage* の女画学生，*The Moon and Sixpence* の Stroeve 夫人，*Up at the Villa* のヴァイオリン弾き，“Alien Corn” のフレディ——等を見ると，そこに共通するものを認めざるを得ない。我執のおかしさ，愚かしさ，悲しさである。

The Razor's Edge の主人公 Larry の求めるものは，無為の法悦境でもないし，美の陶醉境でもない。善行につながる一種の神である。

“The Judgement Seat” (*Cosmopolitans* の中の一編) で哲学者に提出されている疑問，神は All-Power と All-Goodness をいかに調和させるかの問題に対する一つの解答とも言える。

Maugham の思想を要約することは至難である。青年時代から，万卷の書を読むことによって得られた教養と知性が混沌たる姿で共存し，これが後の思想の到達点であると指向するにはあまりにも多岐にわたっている。ある時は真実であり，美であり，ある時は靈魂であり神である。科学者（医者）の修業を通して得られた唯物的思想，人間は物理的法則の所産であり，一定の目的をもって生れたものでないとする考え方，人間性の矛盾を認めながらも虚無的にならず，むしろその矛盾性の故に人間探究に神秘さを感じ興味を示す彼の人生観は，多くの作品から帰納されるものと言って過言ではない。

1. 「剃刀の刃」のテーマ

The Razor's Edge は 1944 年，Maugham が 70 才に達した時発表された小説で，20 編の長編の最後から三番目の作品で，このあと二つの長編 *Then and Now* (1946)，*Catalina* (1948) を書いて創作の筆を絶つと宣言した。作者自身も認めているごとく，他の作品と比較して，構成の点でまとまりが悪く，主人公 Larry が自分の修業のあとを語る第 6 章のように，思想が生のままに長々と露出している所などもあり，*Of Human Bondage*，*The Moon and Sixpence* などと対照すると，評判の作にもかかわらず，欠点を認めざ

るを得ない。しかしこの作家の到達した人生観をうかがい知るためには、Maugham の人生遍歴の総決算とも言うべき *The Summing Up* (1937. 64才) とともに、貴重な資料を呈供している。

1919年極東への旅の途中シカゴに数週間滞在した Maugham は、旧知の Elliott Templeton という米国人に会う。彼はパリーに居住して、絵画のブローカーのような仕事をしている。彼は貴族社会に出入し、上流階級の人間との交渉に最大の生甲斐を感じている人間である。シカゴには彼の妹で、もと外交官夫人であった Mrs. Bradley とその娘 Isabel が住んでいる。Maugham は Bradley 家に招待され、19才の美わしき Isabel とその愛人 Larry (Laurence Darrell) を知る。一方 Isabel を愛している証券会社の息子 Gray Maturin がいて、もし Isabel が結婚を承諾すれば、この世的な幸福は保証されている。Larry は第一次大戦に航空隊を志願して、帰還したものの、定職につく意欲を失ってしまっている。Templeton の招待のディナーの席で、Maugham の隣席の Sophie という少女から、Larry と Gray は親友であり、そのことのために結婚の問題が複雑化していることを知らされる。

Templeton も自分の姪の結婚相手として、Larry には賛成しかねている。この商人は米国からパリーに渡り、上流社会の人間相手に美術品の仲買いをやり、経済的に確固たる地位をきずきあげた男で、彼には社交界のない世界など考えられない。このような Templeton から見ると、図書館に入りびたり、精神的な世界の探索に没入している Larry は人生の落伍者としてしかうつらない。

Larry はパリーに行けば何か自分の求めるものがあるかも知れないという気持で、遍歴の旅に出発する。

このあたりまで作者は二つの世界を描きわけている。一つは精神的な問題に没頭する主人公 Larry の世界であり、もう一つは Isabel と Templeton に代表されるこの世的な常識の世界である。Isabel は恋に身をこがす、やさしい娘心の持主ではあるが、同時に大地に足をつけた生活を人生の第一義と

考えるアメリカ人である。Templeton にとっては社会的地位が人生の全てといえる。この両極端の世界の橋渡しをつとめるのが、作中登場する作家 Maugham で、この場合もストーリー転開の舞台廻しの役割を演じている。

Larry はパリーの安アパートに落着いて精神的放浪の日々を送っている。彼にとって、シカゴが、物質的成功を人間評価の尺度とする卑俗な町とするなら、パリーは気ままな魂の遊泳を許す心の故郷であった。Templeton は妹の Mrs. Bradley を社交界に接触させるためと、姪の Isabel をファッションの本場で磨き上げようと考えて、二人をパリーによびよせる。Larry に再会した Isabel は、説得に努力する。彼女にとっては年 3000ドルの亡父の遺産で定職もなく暮している人間よりは、仕事に生命をかける頼もしい男性を求めたのである。Larry にうしろ髪をひかれつつも、ついに結婚を断念し、彼のアパートで婚約指輪を返すのである。

Isabel と別れた Larry は、フランス北部の鉱山で炭坑夫になったり、ドイツの農家に住込んで、未亡人の夫人と奇妙な関係におちたりする。ボンで知り合った神父の紹介で、修道院の客となるが、ここにおいても至善にして万能なる神が何故悪を創造したかについては、満足のゆく解答を与えてくれない。やがて修道院を出てパリーに戻った Larry は、病苦に悩むモデル女スザンヌ・ルーヴィエ母子を静かな町に保養させる。スザンヌとの同棲生活を送ったりするが、健康の回復とともに、静かに別れを告げ、再び旅に出る。スペイン旅行などをするが、彼の求めるものはついに得られず、印度へ渡る。いくつかの驚くべき光景に接し、印度哲学に興味をひかれた Larry は瑜迦 (Yogi) の行者を師として庵堂にこもる。二年間の修業生活を送ったある日、山に登った彼は、壮大な日の出の光景の中に一つの悟りを開き、新しい生活への意欲に躍動しつつ下山の決意をする。そして久しぶりにパリーに戻ってくる。

一方帰国した Isabel は、かねて求愛をうけていた Gray Maturin と結婚する。Gray は 25 才の若さで年 5 万ドルをかせぐ青年実業家になっている。所が 1929 年の大恐慌は一朝にして Gray 一家を無一文にしてしまう。

Templeton は事態を予測して、財産の保全を図っていたため、パニックの波に呑まれることなく、Gray 夫妻は、彼の援助によってパリーのアパートで不自由ない生活を送っている。

たまたまパリーに滞在していた Maugham に、Larry は出逢い、Isabel とも久々の対面をする。ある日、Isabel のいたずらな好奇心から、Maugham が一同を案内して、酒場に遊びに行った時、思いがけないアメリカ語を耳にする。それは今は娼婦となっているシカゴの娘 Sophie であった。Larry は彼女と結婚することで救ってやろうとするが、Isabel の嫉妬心から出た計略にかかり、Sophie は長い間自制していた酒を口にす。もはや Larry の妻になる資格を失ったと自責の念にかられ、行方をくらます。Larry が再会したのは、何者かに惨殺され保管されている警察の検屍所においてであった。

パリー在住の Gray は、ある発作に苦しんでいるが、Larry はインドの聖者と暮している間に会得した秘術でなおしてしまう。神の全能と罪の矛盾をキリスト教を通して解明できなかった彼が、インドのヒンズー教から‘絶対者への帰一’という教えを学び、‘悟り’をひらいた経緯を、再会の Maugham に長々と語るのである。

Gray 夫妻が Larry との再会を楽しんでいる間にも、Templeton は地中海沿岸の別荘で老衰と戦っていた。彼は社交界の非情をののしりながら、寂しく虚飾にいろどられた人生の幕をとじる。社交界を一生の住み家としてきた彼は、天国でも上流社会に入ることには少しの疑も持たない。死後の装いには、元気であれば、仮装舞踏会に着て行くはずの伯爵の衣裳をつけるように遺言する。

病のいえた Gray 夫妻は伯父 Templeton の遺産を元手に、故国で再出発の見通しが立つ。Larry は、長い遍歴の収穫として、ささやかな試論集を出版した後、久しぶりに母国に向けて立つ。Isabel は、念願の財産と地位を、Larry は心の満足を得て、物語は大団円を迎えるわけである。

Maugham はこの物語を次のような言葉で結んでいる。「…ひどく驚いたことには、少しもそのつもりはなかったのに、ちょうどぴったり、成功物

語を書いていたということが、私にわかりかけて来たのだ。というのは、私に関りのあった人たちはみな、それぞれ望んでいたものを手にいれたからだ。Templeton は社交界の名声を、Isabel は相当な財産を背景にして、活動的で、教養のある社会にしっかりした地位を、Gray は毎日9時から6時まで通う事務所を持って、堅実で、有利な仕事を、Suzanne は生活の安定を、Sophie は死を、そして Larry は幸福を——。たとえどんな知識人たちが、横柄にあら捜しをしようとも、われわれ大衆は、心の奥底ではみな、成功物語が好きなのだ。それで、たぶん私の結果も、結局それほど不満足なものではあるまい。」

この小説は、Maugham が1938年のインド訪問の時の見聞を土台としており、作者のヒンズー教への関心と博識ぶりは、随想集 *Points of View* (1958) の“The saint”でも詳述されている。問題点として神秘思想に傾倒し、自ら Yogi の修業を実践する Larry に実在感が欠けていることが指摘できる。*Of Human Bondage* の Philip Carey の場合は、少年時代から身体的な不具に劣等感を感じつつ生長し行く過程が、説得力を持ち、外界との間にささやかな調和を見出し、心の平静を得るまでの血のにじむ苦闘にリアルな共感を覚えさせるのは、作品として成功しているからであろう。Strickland のハイチへの脱出は、一見非現実的ではあるが、ハイチにおける狂ったような芸術家としての生活の描写には、読者をうませない魅力を持っている。これらと対比する場合 Larry の苦悩は、観念的であり、戦友が自分を救うために戦死したことにショックを感じて、世俗的幸福を捨てて求道の彷徨に入っている過程には、作品としての説得力が欠けていることが明白である。印度における Larry の体験を、自分自身の口から語る形式で、かなり詳細に伝えているが、ダイアログに独得の巧妙な面白さを発揮する Maugham が、ここでは、一方的な説明の形で話が進行し、むしろ冗漫のそしりをまぬかれない。

Maugham らしい筆のさえを感じさせるのは、世俗的な人間の扱い方に

あらわれている。例えば、麻薬中毒に堕したかつてのシカゴの友 Sophie と結婚によって救おうとする Larry の間に、Isabel が入りこんで、昔の恋人への支配欲から、ついに Sophie を死に追いやる場面とか、臨終の床にあって、知人の招待状の返事を忘れていたことを気にして、Maugham に代筆させる場面——「Elliott Templeton 氏は、神との先約のため、ノヴェマリ公妃の有難い御招待に応じ難きを遺憾に存じます。」と記させる——になると、まさに彼の独壇場の感すらいだかせる。この作品が、多くの読者を持っているにもかかわらず文学作品としての価値に欠けることの主たる原因は、Maugham は小説家であるが、思想家、哲学者ではないということではなかろうか。Larry の魂の遍歴は、彼の射程外にあったと言わざるを得ない。

The Razor's Edge が、1944年の出版以来、物凄い評価を得たことに関し Richard A. Cordell はその著 *Somerset Maugham — A Writer for All Seasons* の中で、次のような見界⁽²⁾を述べている。99%のアメリカ人にとって重要と思われるもの(物質的栄達)について、Larry が無関心であることが、彼らの好奇心をそそったためである。それは、彼ら自身が考えていた価値全体について疑問を持たせ、大学時代の理想図、すなわち実業の成功、郊外の、もしくは田園の生活は空虚で興味のないものではないだろうか、彼らの気持を落ち着かせなかった。戦争によって生活を転倒させられて、彼らが戻りたいと憧れたり、それとも、これから成しとげたいと、憧れたりしている「立派な生活」(good life)の価値について、Larry によって疑問を持たされた兵隊たちから、作者は何万通もの手紙を受けとったと報ぜられている。

これは、この作品が第二次大戦のさなかに出版されたことを考えてみると、戦争体験を持った兵隊もしくは、在郷の一般人の間に既存の価値に対する疑問が澎湃として起っていたことは想像に難くない。

Cordell は、この作品を傑作と評している。戦争と戦争の間の西欧を鋭

(2) Richard A. Cordell: *Somerset Maugham* (Indiana Univ. Press 1969) pp. 155-157.

く描写し、アメリカ人の登場人物を取扱うことについて、作家は控え目で不安を感じていながらも成功をおさめていること、Elliott, Isabel, Gray, Suzanne, Gray の父, Mrs. Bradley などの鋭い描写、ユーモア、明瞭な、流麗な、しかも成熟した文体などがあげられる。しかしこの小説は真の偉大さに到達していない。それは主として、Maugham が、聖らかな Larry を実在の人物というよりも一つの現象とみなしているからである。読者は Larry の存在を、その作者同様信じないのである。この作品は *Cakes and Ale* のように、ひきしめることができるのである。例えば、Sophie の不潔な物語は省いて差支えない。というのは Larry の精神教育を完成する役目を果すには、彼女の冒険と死の狂乱はあまりにもはげしく、おそらくは狂気じみているからである。

Maugham 鼻肩の Cordell としては、当然とも言える好意ある評言であるが、Sophie との一件はプロットとは直接の関係は無いとしても、Maugham らしさのあらわれと読まれるが、一つの見界として記述するにとどめる。なお、彼は Maugham の三つの傑作 (*Of Human Bondage*, *The Moon and Sixpence*, *Cakes and Ale*) と同等の真価を持てたらと悔まれるとも付言している。

2. Maugham における思想の遍歴

人間の行為がはかり知れないものであるという Maugham の判断は、すでに彼の少年時代に始まっていた。彼は性格の矛盾、人間性の複雑さのために、行動の動機が、他人から見た場合は勿論、その人間自体にも曖昧になっていることにも気づいていた。親切で、お互に深く愛し合っている息子と父親が、商売の取引きにかけては不誠実の場合があるし、また寛容な人間がとてつもなく自己中心的であり得るし、極端な憐憫の情と残酷さが、同一人間に存在することも知った。

彼の宗教的な見解については、なんらの神秘性もない。*Of Human Bondage* の Philip Carey は若き日の Maugham の投影である。両親の死

後、牧師の伯父に引取られるが、牧師夫妻のケチでグウタラで虚偽に満ちた生活から、寄宿学校に入るが、そこでは跛の故に学友になぶり物にされる。信仰は山をも動かすということを聖書で読んで、自分の跛の治癒を神に祈る。満願の朝、ついに奇蹟は起らなかったことがわかり、最初の疑問が生じる。そして宗教的信念をかなぐり捨ててに至るのである。「私は神を信じていないことを嬉しく思っている。世の中の不幸と、その悲しみを見るときに、神を信じるほど、恥かしいことはないと思う。」と語っている。人間の行動の源泉には利己主義があると彼は考える。それは自己保存のための自然な欲求であるが、利己主義を悪とすることによって、理想主義は人間を偽善者にしてしまっている。苦しみが人格を高め、力強くするというロマンチックな考えについては、苦しみは人間を気むづかしくし、自己憐憫的にし、不愉快にするという。

彼は理想主義を改撃する。Maugham は悪というものが全能、至善の神と調和することについての満足すべき解釈を見出すことができなかった。しかし Maugham は、全てのものを否定するわけではない。時によって人が発揮する精神の勇敢さ、うち破ることのできない束縛に反抗し得る人間の能力を、彼は讃美する。また教養、教育の恩恵をうけない、人間の本能に根ざす崇高さを信じている。

さけ難いことを受けいれるだけの冷静さと、勇気を与えてくれる哲学を築き上げることは困難な道であった。子供の時、青年の時、自分の疑問に答えることができないために悩んだ。22才の時、人生のあらゆるものが、意味がないし、苦痛と労苦は無駄であるという結論に達した。St. Thomas 病院の第4年目においてさえも人生の意義は、目的は、行動の指針はと疑問をくりかえした。しかし、その混沌の世界に光明が訪れる時が来た。Philip は大英博物館で200年もたった墓石に腰かけて、人生には意義はなく、従って、それを見つけようと、むなしく努力する必要はないのだと歓喜する。Of Human Bondage のこの感動的なくだりは、実際にはもっと長い作者の経験を圧縮した形で表現したものであろう。「Cronshaw のことを考えなが

ら、Philip は、ふと彼がくれたペルシヤ絨緞のことを思い出した。人生の意味とは何か、ときいた Philip の質問に対して、彼は、これが答えだと言った。Philip は、突然、その解答に思い当った。彼は一つクスリと笑った。わかってみると、それは、まるであの謎々遊びのあるものに似ていた。さんざん苦しんだ掲句、さて解答を教えられてみると、なぜこれしきのことがわからなかったのか、われながらわからない。ちょうどあれだった。答はあまりにも明白だった。人生には意味などあるものか……」と Philip の歓喜する姿が述べられ、106章を「Philip は幸福だった。」と簡潔に結んでいる。

彼は人生哲学を Plato, Spinoza, Schopenhauer その他, St. Thomas 病院時代の科学の研究のみから形成したのではない。人間とその行動をつぶさに研究し、ついには必然論や宿命論を深く信ずる所から、形成したものである。

彼が70才になって、過去をふり返って見る時、肉体の種々の偶然さが、人間の魂をどのようにして形成できるかを指摘した。彼がどもりでなかったら、背が数インチ高かったとしたら、彼の魂は全く違ったものであつたらうと公言する。子供の時、歯に対して、適当な注意が払われていたら、彼の顔の形は違っていて、その結果、知人の反応も違っていただであらう。従って人間に対する彼の性向、態度も違っていただであらうと語る。

Maugham の倫理観は、大部分、彼の唯物的 人生哲学から出てきている。日々の生活の要求、必要が、正、不正に対するわれわれの観念を形成するのだと信じている。そして、その観念は、これらの要求次第で変わるのである。純粹の愛他主義というものは稀である。それは、人間の空想から生れた作りごとでしかない。だから、それを他人に求めることは、賢いことではないと信じている。

彼の人生観、人間観が皮肉なものであるとして共通に彼に向けられた非難を、彼は平然と打消している。自分の持って生れた才能は、非凡ではないが、それを補う常識を持っていると告白する。

彼が快樂主義者であるという非難に対して、彼はその真実を認め、全て

の人間は、自分の楽しいことを好んでやるものだ、と自己弁護をする。Maugham は、快樂主義者であると同時に現実主義者である。幸福と同じく快樂も偶然のものであり、それ自体が目的でないこと、また幸福は、ひたすら快樂を求めることに集中している陽気な人からは逃げて行くものであることを心得ている。彼のいう快樂は感覺の満足のみをさすのではなく、精神の快樂も含んでいる。

The Summing Up の 63 章から 77 章に至る間において、彼の哲学論の転開をみる。ドイツ遊学中、Kuno Fischer の講義に出席して Schopenhauer を読みはじめて以来、哲学に並々ならぬ興味を持ち、おびただしい哲学書を読みあさる。Hegel には一貫して退屈したと記してある。Spinoza を読んだことは一生のうちで際立った経験の一つで、大山脈を見た時のような、壮麗な、勝誇ったような感じで自分を満したと言う。彼の哲学探究は、古典哲学者から、近代哲学者へと移って行った。そしてプラグマティズムに一時心をひかれる。Bergson は読んで面白いが、納得できぬ所があり、Croce にも、自分の目的にそうものは発見し得なかった。Bertrand Russell は理解し易く、その英語のすばらしさに讃嘆の眼をかがやかしている。しかし彼の求めていたものは、首尾一貫した哲学体系であったがために、Russell もまた彼に満足を与えることができなかった。その結論として、自分の求めるものは自己自身の表現に外ならないから、自分で書くより方法がないと決心する。しかしその夢は実現されることなく終る。しかし、67 章以下の所で、彼の言葉を用いて、悪の問題、それに大いに関わりを持つ神の存在の問題を考え、宇宙の広大さに畏怖し、哲学者たちや聖者たちの語るところに満足できず、モハメッド、キリスト、仏陀を超え、ギリシヤの神々、エホバ、バール神を超え、遠くウパニシャッドのブラーマまでさかのぼって行く。しかし結局は、神秘の奥をきわめることができず、不可知論者にとどまるのである。人生の価値として、真善美を設定する。真については、人間はつねに、自己の虚榮、悦樂、利益のために真理を犠牲にしている、真実によって生き

ているのでなく、仮託によって生きているのであって、その理想主義は、自惚を満足させるためにつくり出した架空物語に真実の極印をおすための努力にすぎないを考える。次に美に関しては、例えばある彫像が古代ギリシヤ人によって彫られていようと、現代フランス人に彫られていようと、それは問題でない。それが今現に、美的感動を与え、この美的感動が刺戟となって、われわれを仕事へと駆りたてることだけが重要である。そして芸術家は結果を企図しない時にのみ、人を動かす結果となるというような、彼得意の逆説を述べている。最後に、善はこの現象世界では、それ自身目的であることを要求する唯一の価値であって、徳行がその報酬であるとし、このような平凡な結論に到達したことを恥しいと思うと結んでいる。

(46. 7. 30)